

平成27年度障害者の芸術活動支援モデル事業の事後評価について

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置

- ・ 障害者活動支援センターの活動内容、人材育成のための研修計画、地域の作品の発掘・発信等、1年目と比較して着実に進歩している。特にマネジメントのための研修は、モデル事業として発信できるものになっている。
- ・ 県内全域への波及・浸透を心がけながら進めており、かつ継続的な活動拠点に新たな空き店舗を活用して開設する等、評価できる。
- ・ 事業を通じて被災地の復興や地域の再生に繋がる活動ができたことは、社会的にも評価できる取り組みをされていると思います。また、人材育成においてのきめの細かい活動によって今後の活動を継続させていくうえで、効果が期待できると思います。
- ・ 実施内容が具体的に報告されているため、活動と考え方の関係も理解しやすい。丁寧な取り組みである。
- ・ 相談支援の専門家にヒアリングをするなど、効率化、有効化に向けた選択と集中が的確に行われているのは高く評価できる。また1年間の中で連続の小規模な研修を確実に実施された点も、モデル事業にふさわしい。そのノウハウについて、他の実施団体との情報共有が望まれる。また、精神障害者の芸術活動には、アニメーションや3DCGの制作などがあり、他の障害の当事者とは異なる状況にあるなど、新しく発見されたニーズについても適切に対応するために、広く共有すべきだろう。次年度の課題は、文化セクターとの連携強化であると自己分析されていたように、今後のブレイクスルーに期待したい。

社会福祉法人愛成会

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置

- ・ 権利保護、相談支援、人材育成、合同委員会の設置、ネットワーク構築を地道に行っていることは評価できる。
- ・ 昨年度と比較して、どこに異なりがあり、新しく取り組んだこと等の進歩の姿が見えると良かった。特に東京という人口規模の大きなエリアでの実践の限界か、東京都内における位置づけが見えてこなかった。
- ・ 著作物利用許諾契約書の電磁データ提供、相談窓口での「事前相談シート」方式や「相談管理システム」の開発、「移動アトリエ」支援者の「コンパ」等の取組等具体的で、次の展開につながるものと評価できる。
- ・ 2年目となる活動で当事業活動が広く周知され、活動も活発化している。また、作品の発表の機会も多く、協力者との連携やネットワークの構築も進んでいると思います。
- ・ 昨年の実績を踏まえ、今年度は色々と工夫されて良くなったといえる。障害者と美術について、各団体には考え方の相違があることも多いが、基本的な美術に対する考え方を明確にして、都内の活動を強化してほしい。
- ・ 東京が首都である以上、地域密着を目指していたとしても脱地域的な活動をしなければならない現状に対して（具体的には、他府県やマスメディアからの問い合わせに対応するなど）、実際的かつ効果的に対応しているところは高く評価ができる。また、対話による作品鑑賞のメソッドを取り入れるなど、作品をより深く理解することに向けての有効なプログラムが実施されているところも、モデル事業にふさわしい。この取り組みについては、より積極的に発信していくべきと考える。なお、企業のCSR担当の参加があったイベントもあったようだが、そこから、本事業を周知する際のアプローチを、規模を問わず、一般企業にも広げていくことが必要かもしれないと感じた。

特定非営利活動法人スローレーベル

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置

- ・ 福祉施設等に属していない障害者へのアプローチや市民との相互補完的関係性の構築など、すばらしい視点があった。しかし、モデル事業内容としての障害者芸術活動支援センターの設置による著作権保護に関する相談への対応や協力委員会の設置にも難があった。アクセス・コーディネーターなどの人材育成も新しいものであるが、実施計画書に記載がなく、思いつきの領を出ていないのではないか。
- ・ 相談窓口に「アクセス・コーディネーター」を4名も確保し十分な体制を整えているが、その活動の成果と課題が十分に示されていない。
- ・ 参加者の多様性と支援する側の多様性、「支援」ではなく「相互補完」として事業を実施した視点は、共生社会を考えるうえで重要で、そこにフォーカスされたこと。また、裾野を広げるために「環境」アクセシビリティの整備をされたことは良かったと思います。
- ・ 全ての活動において、もっと工夫が必要です。活動内容の報告は、もっと具体的にお願いします。まだ経験不足のように感じられるので、組織的にきめ細やかな活動が必要です。
- ・ アクセス・コーディネーター、アカンパニストという新しい役割の創出とそのトレーニングという「人材育成」は、他の実施団体にはないアイデアとして高く評価できる。また、福祉関係者以外の参加者を呼びこめた点もまた、当該団体のこれまでの活動あったことだろう。しかしながら、本事業がその根幹として求めている「活動支援センター」のプログラムについては、積極性に乏しいと感じられた。たとえばニーズ把握の手法が受け身であるため、潜在的なニーズを捉ええない。他の実施団体においては、もっと能動的にニーズの調査をしているところがある。初年度であれば、恣意的になってしまうことをおそれず、ニーズのサンプリングを行うべきだっただろう。また協力委員会が有機的な意見交換の場として機能していたかどうか、提出された資料を確認する限りでは疑問である。なお、配布されたフライヤーには、厚生労働省のモデル事業という文言の下に「アカンパニスト 研究プログラム報告展」といった書き方がされていたが、私見の限り、これはあたかもそうした職種の創出やその有効性の研究それ自体を厚生労働省が認めたと見え、その扱い方には違和感を感じた。

特定非営利活動法人ライフサポートはる

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置

- ・ 佐賀県という地域において芸術活動を支援していく戸惑いを感じられる。また芸術活動に取組が新しい地域における課題でもあるから、モデル事業への挑戦の意味は大きいものがある。支援手法としての「コンサルテーション」が果たす意味について考える必要があるかもしれない。
- ・ 「裾野を広げる」「一歩目を踏み出す」というテーマに沿って、特に「出張型コンサルテーション」や作品展示の「協力店舗」の開拓等、効果的に取組を進めていると評価できる。
- ・ これまで、障害者のアート活動が活発に行われていない地域でもあることから、まず県内のニーズを収集したこと。ニーズに応じるためにきめ細かいコンサルティングを行ったことが良かった。
- ・ 先進的な活動を参考にしながら、佐賀県独自のユニークな活動も考えてほしい。
- ・ 限られた時間でニーズ調査、コンサルテーション、展示会の実施まで効率的に行っていることが高く評価できる。とりわけ「コンサルテーション」という姿勢を貫くことは、他のモデル事業の指針ともなる方法論でもあろう。「まちづくり」との連携により、佐賀県ないし佐賀市のブランディングにも資することが期待される。今後の障害者の芸術活動支援の指針ともなるだろう。

社会福祉法人ゆうゆう

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置、調査・発掘、評価・発信

- ・ 北海道という広大なエリアを念頭において、いかに全道を巻きこんで芸術活動を推進させていくかの挑戦は評価できるものである。特に学校と精神障害領域へのアプローチはモデル事業として期待できるものである。大学との連携も様々なことを発信できるであろう。
- ・ 実態調査を踏まえて企画・展開し、各地に出向いて実態把握や連携の足掛かりを築くなど評価できる。なお、アンケートの事案等に見られるように「政令市」の存在する道府県については、連携十分に配慮をする必要がある。
- ・ 全国的にみても、北海道地域は障害者のアート活動の気運が高い地域であると思う。その中で、広域に渡るにもかかわらず主要な団体を取りまとめられた成果は大きいと思います。このネットワークを土台にさらに裾野が広がることを期待できると思います。
- ・ 精神医療分野との連携は評価できる。今後も深めてもらいたい。北海道における状況が明確になってきた。北海道教育大学岩見沢校の美術教員養成のカリキュラムに障害者と美術の内容を入れてもらおうと、人材育成の面において大きい。
- ・ 早い段階から精神医療分野との連携を行ったことや、芸術系大学との実践的な取り組みなど、他の実施団体にはない（けれども、実際にはとても実際的で効果的な）取り組みが高く評価できる。また、「圏域インストラクター」の育成という考え方は、（北海道ほどの明確な圏域を持たないにしても）他府県ないし他エリアにおいても有効と予想される。他のモデル事業のモデルとなるような活動の構築と発信を目指していただきたい。

一般財団法人たんぽぽの家

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置、調査・発掘、評価・発信

- ・ 障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置、調査・発掘・発信等、地道に行っていることは評価できる。実地で学ぶ研修の必要性、芸術活動が何を目的とするかによって評価も分かれることに視点を置いて活動していることも重要である。
- ・ 前年度の課題をもとに具体的な取組を進めている。「オープンアトリエ活動」等地域を回る取組や展示会も県内地域を考慮して開催する等評価できる。
- ・ 障害者のアート活動においては、知的や精神障害者が主となる現状の中、視覚障害や聴覚障害の方々に視点を置き、支援者・協力者も多岐に渡って取り組まれたことは評価されることだと思います。長年の活動で培った経験から、地域だけではなく全国的に波及できる取組みをされたことも良かったと思います。
- ・ 今までの活動経験を生かし、問題意識の明確化ときめ細かな対応があり、評価できる。あとは、精神医療関係にも触れてほしいのと、海外からのアーティスト インレジデンスも活動に加えていいのではないかと。交換プログラムなどがあれば、優れた制作者にとってさらに作品が良くなることもあり、人材育成として良い。
- ・ オープンアトリエを複数回にわたり実施、盲学校・ろう学校の教員によるレクチャーの開催、奈良県立大学との連携と東京での展覧会への参加、病院や裁判所や大学での展覧会の実施等、ユニークかつ効果的な活動がなされている点が高く評価できる。ただし、「調査、発掘、評価、発信」の事業について言えば、「発信」という目的に鑑みれば、その開催場所（裁判所、病院、大学）については、より実効的な場を含むことも検討すべきだったのではないかと。

社会福祉法人グロー

事業実施内容：障害者芸術活動支援センターの設置、協力委員会の設置、調査・発掘、評価・発信、モデル事業連携事務局の設置

- ・ 障害者芸術活動支援センターの設置による美術活動支援方法や著作権保護に関する実践は、昨年度より着実に進歩している。特に展示会開催のためのワークショップは全国のモデルとなるものである。協力委員会も幅広くなり、教育関係者との連携が新しい段階に入ったと評価できる。作品調査による評価の手法についても学ぶところが大きい。モデル事業連携事務局の設置、活動については、全国の人が取り組めるマニュアル等の作成に期待している。
- ・ 地元での取組も着実に進めながら、モデル事業連携事務局として、各地域のとりまとめを確実にやっている。ただ、前年度同様に今後の「課題」についての分析をもう少し具体的に挙げてほしい。
- ・ これまでの実績や経験を生かし、県内のみならず全国に波及する取り組みをされていると思います。また、相談業務・調査などから得た情報を集積・分析し発信されていることで、同様の事業を行う団体（施設）のモデルとなる事業になっている。
- ・ モデル事業ではあるが、それぞれの事業所の美術に対する基本的な方向性について、議論を深めてほしい。
- ・ 参加型展覧会への参加機関の数が多いことや、プロセスがこなれていることが高く評価できる。また活動支援センターの活動の一環として開催されている合同企画展(ing展)の取り組みについては、その意義や方法論についてもっと知られてよい。メタな視点から本展の意義を分析し、発信することについての工夫をされることが望ましい。また、障害者の芸術活動をどのように評価するかについては常に議論となるが、その難しい問題に対して、「調査・発掘・評価・発信」のプロセスの中で言語化を試みているところは、記録としても試みとしても非常に重要である。高齢者やひきこもりがちな人々をボランティアとして参画してもらった運営方法も、意欲的でモデル事業にふさわしい。ただその広報周知の手法（展覧会の命名方法を含む）については、再考の余地があるだろう。